第５章　民俗・習俗

第１節　年中行事

久賀島の年中行事は、正月行事が多く残っている点に特色がある。ここでは、昭和 55 年の民俗調査成果に基づき、正月行事を中心に蕨集落と市小木集落の様相を述べる（立平 1981）。

（１）蕨集落

①正月行事

歳末から新年の行事一覧を示す。なお、特に断りがない限り日付はすべて旧暦である。

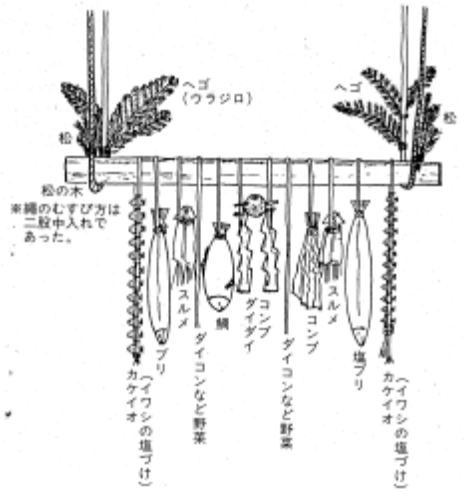
- 12月20日～25日
  - 大掃除（各戸毎）
  - 墓掃除、宮掃除（氏神）
- 12月25日頃から
  - 正月のモノつくり（注連縄、幸木ほか）
- 12月26日
  - 正月飾り
- 12月25日～27日
  - 正月買物（福江へ）
- 12月28日
  - モチ飾り（夕方満潮の時）
- 12月29日～30日
  - 正月料理つくり
- 12月31日
  - ヒュウビキ（表開き）
- 1月1日
  - ワカミンクミ（若水汲み）
  - オシセトリ（若潮汲み）
  - 正月のゼン（赤飯）
  - 宮参り（氏神）
  - 墓参り（先祖様参り）
  - 親類まわり
- 1月2日
  - 船祝い（船霊様まつり）
  - 田ノ神様、五輪様
  - 墓参り（先祖様参り）
  - 夢開き（初夢）
  - ミチンオロシ
- 1月3日
  - 不浄日（行事は行われない）
- 1月5日
  - 五日正月
  - 松のあける日（一次明け）
- 1月7日
  - 七日正月
  - オンノメ焼（飾物を焼く）
- 1月14日
  - 松の内明け（二次明け）
  - シリタタキタロベイ
  - 年占

正月行事は 13 月 25 日頃からはじまる。いろいろな行事に先立って、各家では大掃除が行われるし、墓掃除や神社の掃除を行っている。これは、盆行事が旧暦 7 月 7 日の墓掃除から始まるのと同じように、正月という晴れの日に向かって清めを行うことを意味している。

A.正月のモノつくり【12 月 25 日】

大掃除が終わった翌日から、注連縄やサイアン様など正月の飾物作りを始める。この飾物つくりを行う人は一家の主人である。だいたい正月のモノつくりは、12 月 25 日から 26 日頃行われ、その日に飾りつけられるところもあるが、大部分は 26 日以降につけられた。

正月のモノつくりの中で、特に注意を引くのが「サイアンサン」と呼ばれるものである。蕨で聞くと、「シャイアンサン」というようにも聞こえる。一般に「幸木（さいわいぎ）」といわ



サイアンサン模式図

れるものである。奈留島大串で「サヤドン」、福江で「シャー木」、同じ久賀島の市小木で「シャワドン」と呼ばれるものは皆同じである。

蕨のサイアンサンは、松の木の幹を長さ一尋に切り、皮をはいだものを玄関脇につるしていた。サイアンの木は毎年取り替えるものではないが、家を新築したり不幸のあった場合、歳末に作り替えることがあった。サイアンの木が玄関脇につるされている時、玄関には入り方があって、ウレ（末）の方から先に入ることになっている。従って、モトが外へ向くことになる。常時つるされているサイアンサンに歳末になるとお飾りがされ、正月の魚類がかけられるわけである。

まず、サイアンサンの子と言われる 12 本の縄がつるされる。閏年は 13 本になる。その両脇にヘゴと松の葉が付けられる。真ん中には、ハシ 2 本にダイダイが通され、コンブに巻かれてすわる。さらに「カケイオ」というイワシの塩漬けを、ひとさげに 12 匹ずつ組んで対に下げた。他は特別に決まったものはないが、イカ、ブリなどをサイアンサンの子と呼ばれる縄にいっぱいに下げるのであった。

注連縄は 26 日のうちに 3 組作った。飾る場所は、神棚、玄関、床の間である。最近は、必要に応じて器物に盛りつけることがあるという。

B. モチ搗き【12 月 28 日未明から】

旧暦 12 月 28 日頃にだいたい餅つきを行っているが、日選びをしている。山隣亡（三輪宝）は八方ふさがりといって避けたし、29 日は「苦餅」といって日が悪かった。12 月の三隣亡は、午（うま）の日に当たっており、その日は火事が起こりやすい日といわれ、火を使うことに注意した。これらの日には餅つきをしなかった。

また、28 日は一番鶏が鳴く午前 3 時頃から、別の言い方では申（さる）の刻からモチ搗きを始めたという。このように夜の明けないうちから始めるということは、1 軒で 1 俵も搗いていたことによるといい、仕事の段取りのため夕方までにはすませたかったと言っていた。しかし、一方では、未明の頃から始めるということに、一種の儀礼的な意義が見いだされる可能性もある。

ところで、旧暦の正月といえば、一番寒い時期である。そのころには朝搗いたモチが夕方にはもう堅くなりかけている状態で、鏡餅もすわりが良くなり、小モチは２段 3 段重ねにしてモロブタに片づけた。その後、甕などに水を入れ、「水モチ」にして 3 月頃まで食べたという。

C. モチ飾り【12 月 28 日夕方】

モチ飾りは、モチ搗きの日の夕方、満潮の時を見計らって行う。何事も「みつる（満願のこと）」ようにという意味を込めて、満潮に行うという。一家の主婦が用意して、主人がすわらせる。鏡餅は、おすわりになるという表現をしている。

鏡餅は、「カミ（神）さんのモチ」と俗称されている。二段重ねにして、上にダイダイを載せ、上下のモチの間にヘゴ（ウラジロ）かミヤマザカキとコンブを挟む。それを三方や盆の上に乗せて供える。それぞれの供物には、次のような言い方がある。例えば、ダイダイは家が代々栄えるということ、ヘゴも家が栄える意味があるという。コンブは喜ぶといったように、掛詞となっているものであった。これを床の間に据えるわけである。

モチ飾りは、鏡餅より他に小さな小餅を二段重ねにして、次のような場所に供える。

- 伊勢神宮　（中央）
- 大国主命　（左側）
- 豊国大明神　（右側）

　　床の間に軸物がかかっていたり、あるいは神棚に御札が納められている。

- 祇園様
- 金比羅様
- 先祖様　（仏壇）
- 船霊さま　（船）
- 五輪様
- 田の神様
- 机や臼などの器物

伊勢神は国造りの神として中央に、大国主神は百姓の神といい、豊国大明神は豊臣秀吉を祀ったものであり、それぞれを左右に配して神棚に一人一人餅飾りをする。

D.正月買物【12 月 25 日過ぎ】

12 月 25 日すぎから、何人かが寄って三丁艪仕立てで福江に買い出しに行った。女たちの正月買いもんである。また、刺身やイリヤキにするブリは、細石流に大敷網があったのでそこまで男が行っていたという。

E.正月料理【12 月 29 日】

正月料理は、モチ搗き顔割って後、29 日頃から行う。特に正月用として目立つものを次に示す。

- 煮染類：ゴボウ、コンニャク、ニンジン、アゲドウフ、ダイコン、サトイモ、ハス、コブ
  ほとんど食材は福江で仕入れたもので、それぞれを別に煮込まなければならなかったので、時間がかかったという。十分煮染めておけば、寒の頃ではあるし長持ちした。
- ナマス
  蕨のナマスには、生のキビナが入る。ダイコンとニンジンの酢和えにキビナが加わって、地域料理の特色が出ているものである。

他は、キンナゴのイリヤキ、クジラの湯ビキ、カンテン、トロクスンという甘納豆、ソウメン、ウドンなどの類である。クジラは福江で買ったもの、カンテンはトコロテン草を 3～4 月頃めいめいが採っておいたものである。ソウメン、ウドンはソバに代わるもので、蕨ではソバを食べてなかったという。

E.ヒュービキ【12 月 31 日深夜】

この行事について、どのような見出し語を付けたらよいのかはっきりしないが、歳神を迎える意味においてきわめて重要な行事であると思われる。

12 月 31 日、深夜 12 時をまわるかまわらないうちに、男の子が隣近所や親類の家の表戸を開けてまわる行事である。これを「ヒュウビキ」といい、親は子供に「トバアケガイケヨ」と言って送り出している。おそらく「表引き」のことを差し、表戸を開けて歳神様が入りやすいように仕組んだものではないかと思われる。もう少し勘ぐれば、男の子が歳神に化身して訪れる役にあたっているのではないかとも考えられる。男の子は、他家の表玄関に行き、戸を開けながら「アケマシテオメデトウゴザイマス」と言ってくる。当家の人は誰が来たか確かめておいて、正月 2 日にその子供に「ヒュウビキセン（銭)」と言って祝儀をあげた。子供は多いときは 20 軒もまわることがあったというから、重複することがあっても良いので、「訪問神（おとない)」としての歳神の性格を見ることができるのではなかろうか。この時、女の子は絶対に家から出てはならなかった。

このヒュービキについては、具体的な形で「おとない神」の形態を見ることができるのであるが、歳の夜に表戸を少し開けておく例は、五島列島のみならず周辺地域にかなり類例を見いだすことができる。

F.ワカミン汲み【1 月 1 日未明】

若水迎えのことである。子供の「ヒュウビキ」の声がかかった後、新年になってから一家の主人が若水を汲みに行く。蕨では、若水を汲む場所が、ナカノカワとハイカラガワの 2 箇所であった。両方とも湧水の出る地点に作られた小さな井戸である。これをカワと呼ぶ。

若水は、バケツに少し汲んで、家中の者が顔を洗う程度あればよかった。若水を汲みに行く途中、他の人と会っても挨拶など全く話をしてはならないという禁忌がついているのは、五島列島を含む西海地域で一般的な例である。

G.オシセとり【1 月 1 日未明】

若潮迎えのことである。「オシセ」とは、初潮のことを「オシオ」ということからきている。わざわざ「オシセミズ」と言い、それをになってくる桶を「オシセタゴ」と呼ぶ。オシセとりは、1 日の夜の明けない間に初めてくる満潮の時を見計らって浜に汲みに行く。若水汲みの後、家中で一番の長老か、一家の主人が若水で身を清めてから行う。浜から初潮を汲んでくると、かねてから用意してあった笹の葉を潮に浸し、その潮水で神棚や家中の神聖な場所、あるいは家族のお払いをして清めた。

H.正月のゼン【1 月 1 日夜明け前】

正月の膳は、夜の明けない間の 5 時頃から 7 時頃にかけていただく。特に正月の三が日に食する料理が出てくる。一つはセキハンで、もう一つはイワシの塩漬けであった。

セキハンは、糯米に小豆をまぜ蒸したもので、元日の朝、三が日分を 5 升作った。これを細長く握り、1 つの神様に 1 個ずつ白紙に乗せて全部で 11 個、餅飾りをしたところに供えた。

他の地域で元日の朝、雑煮を食べるのと同じ意味であろうか。このような例は、五島列島や西彼杵郡内など長崎県内に比較的多く見られるもので、「モチなし正月」であった可能性を示している。

もう一つはイワシの塩漬けである。祝いものと言って、先に記した「サイアンサン」のカケイオにしたものである。このイワシの塩漬けは、晩秋の頃奈留島から買ってきて、それぞれの家で作った。生のまま塩をまぶして 3〜4 日漬ける。それを取り上げてコモに塩をさらにまぶし干す。こうしておくと、次の年の夏頃まで食べられたという。

このように、伝統的な食べ物が正月の膳には必ずついた。これを正月料理と一緒に夜の明けきらないうちに食べるのは、一種の正月儀礼であると考えられる。

I. 墓参り【1 月 1 日と 2 日朝】

蕨では、初詣の後お墓参りをしている。元旦の朝、2 日と続けて参る。それは盆にお墓参りをするのと全く同じであった。

お盆には、旧暦 7 月 13 日に先祖様迎えをする。夕方、門ちょうちんを灯して先祖様が帰ってくる道を照らすといい、14 日に精霊様の膳を据えて先祖をまつり、15 日には墓までお送りするというもので、盆まつりの期間中に 2 回お墓参りをしている。

五島列島では、この盆行事と全く対置できる正月行事の姿を見ることができる。歳の晩に歳神様を迎えるため囲炉裏に大火を焚く例と、正月 7 日の「オンノメ」の行事は、とりもなおさず迎え火と送り火に対置できる最大の要素となる。さらにその上、正月の墓参りが行われていたとする事実は、盆行事と正月行事の類似性を強調できる事例と言える。ただし、歳神様と先祖様の神的存在形態の問題が今後に残された課題である。

J. 船祝い【1 月 2 日】

船の神様である船霊様のおまつりを行うのが船祝いである。正月 2 日の夜明け前に、一家の主人が浜に泊めてある自家の船まで行って 1 年間の航海安全を祈る神事で、御神酒と膳を供える。すでに歳末には松飾りと餅が供えられているし、正月三が日には大漁旗や船名旗が飾られて賑やかであった。特に新船を建造した家では、その時に旗や祝儀をもらった人々を招いて、お祝いの膳を作った。

小型木造船や機械船にも、すべて船霊様が祀られていて、五島周辺海域では船霊様が海の天候の具合を知らせてくれると信じられていた。これを「フナダマサンがイサム」というように表現している。また、蕨ではフナダマサマは女の神様であるといい、気性の荒い神様であるという。女性を漁船に乗せると天候が悪くなり、海が荒れると信じられていた。

K. ミチンオロシ【1 月 2 日】

まだ茅葺の屋根がたくさんあった頃のことで、新築したり屋根の葺き替えのあった家で行われた。ミチンオロシとは、茅葺の場合、軒先から棟まで葺きあがるため、道木を漬けてそこを踏みながら作業をした足場のことで、その「道木をおろす」という意味であった。屋根普請は秋頃に行われており、道木は仕事始めの 1 月 2 日に結んであった縄を外して、新年になってか

ら仕事が終わったような形になる。前記した「船祝い」とほぼ同様の意味をもつもので、カセイにきてくれた人々を呼んで飲んだ。

L.夢開き【1月2日】

初夢と言われているもので、その吉凶を占うことや1年間の夢見ということでもあった。それをどのように解くかというのが夢開きである。

夢開きでは、良い夢を見た時は言わないことにしており、悪い夢の時に他の人から夢解きをしてもらった。例えば、サルの夢を見ると縁起が良くないというのは、サルは「ナキビシ（泣きべそ)」で顔相が悪いからという。ヘビの夢の場合、特にアオダイショウは縁起が良いという。ほか、いろいろと動物や植物に関する夢解きが数多くあったというが、全部は伝えていない。

M.五日正月（1月5日）

松のあける日といい、この日に歳神が帰ることになっている。それが五日正月として祝われた。松の内の明け方には何種類か型式があるが、一次明け、二次明けの段階的な明け方が想像される。

O.七日正月【1月7日】

正月7日は、七日正月という行事がある。朝早くから神社に向かう道の側で「オンノメ焼」をした。場所はミヤンミチと呼んでいるところである。子供たちが正月の飾り物のヘゴや注連縄を持ち寄って焼いた。このオンノメ焼で餅を焼いて食べると、一年中達者（健康）に生活できるといわれている。また、オンノメは天空を焼き焦がすように大火を焚くもので、一種の魔払いの意味があるというし、この日鏡餅を持ち寄ってオンノメ火にかざしてススをつけ、また家に持ち帰って飾るというのも興味を引かれる事例であった。

P.小正月【1月15日】

正月行事と小正月の行事は、幾分違った受け取り方をされてきた。14 日の晩、再び大晦日の再現をして、15 日に正月を迎えるという形態を取る。従来は、15 日に松の内が明けるということで、五日正月、七日正月、十五日正月、あるいは二十日正月といわれてきたのであるが、蕨では歳神様が五日に帰ると証言されていることにより、小正月行事の性格が正月行事に引き続いたものとは必ずしも言えないような状況も考えられる。1月 14 日の晩は、蕨では年占い、シリタタキタロベイ、成木責めなどが行われていた。

・ 年占い【1月 14 日晩】

1 月 14 日の晩、一家の主人が煎った大豆を口に含み、ユルリに向かって大豆を吹きかける。さらにパリパリの木と、土地でいうボウでユルリをかき混ぜながら、1年間の豊作を占うものであった。その後、パリパリの木は 12 本の紙ヒモ（あるいは神のヒモ）で結ばれ、神棚に据えた。現在では何をどのように占ったのか占術の方法を聞くことはできなかったが、焼罪とでも言おうか、苦労や災いを年の初めにことごとく焼いてしまおうというものであった。この日に一年間の年占いを行ったのは、豊穣を願って予祝を行うのと表裏

一体をなしている。

・ シリタタキタロベイ【1 月 14 日晩】

旧暦 1 月 14 日の晩は月夜である。蕨では、子供たちが「カッシャン（柏）の木」と呼ばれるボウを持って門々をまわりながら、未婚の女性の尻を打つ行事が、シリタタキタロベイである。未婚の女性は、これに打たれるように、あるいは逃げ回ったりして夜遅くまで騒いだという。この時の囃子詞が、「シリタタキタロベイ、ヨカコヲバモテ」と言いながら行うものであった。こうして、この 1 年間に良縁がありますように、あるいは結婚してよい子が生まれますように、という願いがこもっているということであった。

このカッシャンの木は、柏の皮をむいてグルグルと墨で渦巻文様を描いてあった。

②その他の年中行事

正月行事以外の年中行事としては、次のような行事がある。特に断りがない限り、日付は旧暦である。いずれも神々のまつりが恒常的に行われているもので、年中行事の主要な部分である。具体的な内容は信仰に関する要素が強いため、次項「信仰」で述べることにする。

・ 村祭　　2月2日～3日（新暦3月2日～3日）
・ 金比羅様　　3月10日、6月10日、10月10日
・ 祇園様　　6月15日
・ 弁天様　　8月15日
・ 伊勢講　　1月11日、5月11日、9月11日
・ 天神講　　1月25日、5月25日、9月25日
・ オジゾウ様　　毎月1日、17日
・ オダイシ様　　毎月21日、大祭3月21日
・ エビス様
・ ホウニン様
・ ヘンドウサン

（２）市小木集落

①正月行事

次に掲げる行事一覧表は、市小木集落において歳末から新年にかけて行われる正月行事である。必要に応じて後に解説を付した。

- 12月25日頃から
  - 正月行事入り
- 12月28日
  - モチ搗き
- 12月29日
  - 正月のモノつくり
    （モロモ・シャワドン、門松ほか）
  - モチあいさつ
- 12月30日
  - 家掃除
  - 墓掃除
  - 正月買物
  - 正月料理つくり
- 12月31日
  - モチ飾り（夕方満潮の時）
  - 正月のモノ飾り
- 1月1日
  - ワカミンクミ（若水汲み）
  - カネムカエ（若木様迎え）
  - 氏神参詣
  - 正月料理
  - ノウライシキ（直会）
- 1月2日
  - 門寄り
  - クワタテ
- 1月7日
  - 七日正月
  - 飾物あけ
  - 年占い（パリパリ）
- 1月14日
  - ポッポラ（成木責め）
  - 尻たたき
- 1月16日
  - ヤブ入り（子守の里帰り）
- 1月20日
  - 二十日正月

A.モチ搗き【12 月 28 日】

12 月 27 日～28 日頃モチ搗きをした。29 日は「苦のモチは搗かん」といって日選びをしている。糯米は 2 日も前から「ホトバカシ（浸すこと）」ていたという。市小木集落では、ひと臼 3 升搗きで、10 臼以上も搗いた。その日は、朝まだ暗い 5 時前から搗き手を雇って搗いた。一人搗きであるため、交代しながら搗いたといい、糯米がよく蒸れてきれいに搗きあがったものを鏡餅にとった。

B.モチあいさつ【12 月 29 日、31 日】

表題のような決まった用語があるわけではないが、鏡餅ほどの大きな餅を持って、あいさつに回る家がある。市小木集落では、本家とバッケ（分家）の関係がはっきりしていて、正月モチを鏡餅よりやや小さく二段重ねにして、本家に届けた。本家では仏様の前にそれをおすわりさせた。これは先祖様を同一にする一族の正月迎えの形式をとったものと思われる。

また、嫁にきた家から里に、ひと臼を二つに分けて、大きな二段重ねで持っていった。3 升搗きのモチをひと臼全部持っていくことになっており、2 つにして持っていくと、里ではそのうちの 1 つを返すことになっているという。これは歳の晩に持っていくことになっているが、どうしても行けないような事情があれば、1 月 2 日にした。半分を持ち帰るという習慣につい

てはいろいろなことが考えられるが、嫁と婚家との関係が微妙に反映されている事例である。

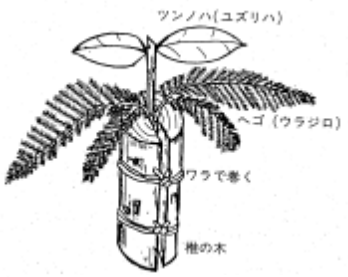
C.モチ飾り【12 月 31 日】

鏡餅は、お盆ほどもある大きさのものを二段重ねにして、上にダイダイを乗せ、下にヘゴを敷いて三方や盆に白紙を敷いたものの上におすわりさせた。だいたい鏡餅は床の間に飾られ、それを行うのは一家の主人であった。

そのほか、小さな鏡餅を二段重ねにして、次のような場所に据えた。神棚、床の間、荒神様には 3 セットずつ、金庫、臼、クド、ツクエ、猿田彦神社（氏神）、観音堂へそれぞれ 1 セットずつ供えた。床の間などは、大きな鏡餅と小さな鏡餅が二段重ねで 3 セット供えられ、モチ飾りでいっぱいになった。これらのモチ飾りは、31 日の午前中、一家の主人が作っている。

D.モロモ【12 月 29 日頃】

正月のモノ作りの一つに、「モロモ」と呼ばれるものがある。モロモとは、長さ 20cm ほどのシイの木のやや太めの幹の両端を切断し、末を上に、本を下にして縦に 2 つに断ち割ったもので、その間にヘゴ、ツンノハ（ユズリハ）を挟み込み、上面から出して 2 箇所でその幹を縛り結んだものである。これを 20 本ほど作った。



モロモ（市小木）

飾る場所は、荒神様 2 本、神棚 4 本、床の間 2 本、台所 2 本、井戸 2 本、猿田彦神社 2 本、観音堂 2 本、シャワンドン 2 本と、モチを供えた場所と同じように供える。モチ搗きが終わってモノつくりをするところと、正月のモノつくりを先にするところもあるが、モノ飾りは 12 月 31 日の午前中に一家の主人が行った。モロモを対にして供えるのは、おそらく男女のご神体を意味するものであろう。

E.シャワンドン

市小木集落では、幸木がシャワンドン（殿）と呼ばれている。松の木の皮を剥いだ長さ 2m ほどのものを、玄関脇の中庭につるしていた。このシャワンドンには、ダイダイとモロモが必ず正月様のしるしとして掛けられるほか、コブや正月用の魚などを掛けた。ブリ、スルメなどは「カケイオ」と呼ぶ。ブリはモチ搗き前に届けたといい、買ったときから塩漬けにしておいた。これを 2 本も 3 本も下げておいた。1 匹 7～8kg もするのであるが、田作りの時のさかなに使ったというほど日持ちした。そのほかダイコンなどを吊しておいたのは、正月料理に使うためである。市小木集落では、吊すものは適当に扱ったということで、強い規制のあるものではなかったが、不幸があったりすればシャワンドンは取り替えた。

F.ワカミンクミ【1 月 1 日未明】

1 月 1 日の行事は、夜のあけないうちに若水を汲みに行くことから始まる。ここでも呼称はワカミン（若水）である。一家の主人がフウカブリをして、ニナイダルとヒシャクを担いで、お供え物の米と塩を持っていった。途中で人に会っても決してものを言ってはならないという

禁忌がある。

市小木集落で若水を汲む場所は、4 箇所であった。いずれもカワという呼称がつく湧水点である。ウエンカワ、ムカシンノカワ、ワッタンカワ、シオンバンカワの 4 箇所である。若水を汲んでくると、家中のものがそれで顔を洗った。

G.カネムカエ【1 月 1 日未明】

若水汲みが終わると、すぐ「カネムカエ」という行事がある。カネムカエとは、カナクソをワラヅトに２包みずつこしらえて山へ行き、トウの木と呼ばれる木の枝を切って、その枝にカナクソのワラヅトをぶら下げて我が家に迎えるというものである。このカネムカエを行うのも一家の主人である。それが終わると玄関の戸が開くといい、男の子が戸を開けた。

これを市小木集落では若木様迎えと言っており、ワカミンクミと関連のあるものなら若水で清め、そこへ山から若木様に乗った金の神様が家々においでになるという形式が取られることになる。歳神様の性格がいくらかはっきりした姿でたどれる事例ではなかろうか。その後、床の間で一家揃って正月料理の膳につくのであるが、ここでもまた、歳神様を迎えて直会の膳が夜明けとともに行われている意義がはっきりするものであった。

H.ノウライシキ【1 月 1 日朝】

おそらく直会式のことを指すのであろうが、本家と分家や親しい間で正月客の行き来があった。紋付き袴姿で本家に集まるのが、朝 8 時～9 時頃。分家の主人が一人で行った。その後は 5 人ほどの組内でまわる順番などが決まっており、座を順繰りにかえて正月祝いを行った。この日は何も持たないでまわることになっていた。

I.門寄り【1 月 2 日】

特別に決まった呼称ではないが、1 月 2 日は正月の客呼びを行っている。夜の明けないうちから、子供か主婦を使いに立てて、「オッがところにきてくれ」と正月客を呼びにやるのである。こうして一番早く呼ばれたところへ行くことになるという。元日のノウライシキが比較的形式的なところがあるとすれば、2 日のそれは親しい者同士のつきあいということになろうか。

J.クワタテ【1 月 2 日】

正月 2 日は仕事始めの日である。夜が明けるかどうかという頃、一家の主人が畑に出て土を掘り起こす仕草をする。そして、歳末につくっておいたモロモを 2 本持っていき、畑に据えるのである。今年も豊作でありますようにと口の中で唱えながら、祈願する行事であった。

K.飾物あけ【1 月 7 日】

1 月 7 日は七日正月という。この日の夜遅く、「パリパリ」という行事を行う。パリパリと音がするのは檜の葉であり、これは正月になってあらかじめ取っておいた。これをユルリにくべて大火を焚き、パリパリと音を出し、家内の悪いものを焼き払うものであった。

また、檜の葉の一部を紙で巻いて縛り、それに魚の尾を刺して荒神様に供えた。これは 1 年中飾っておくもので、次の年の 7 日に同じようにパリパリで焼くという。

また、この日は飾物を下げてオンノメヤキを行う日であり、松の内のあける日であった。家

の内でも大火を焚いて飾物の一部を家払いとして焼いたのは、正月行事の締めくくりでもあったと思われる。

L.年占【1月7日】

年占いの行事とともに行う行事である。一家の主人が、大豆を煎ったものを口に含んで噛みながら、ユルリの火の火勢があがったところめがけて吐きかけるのである。これは1回1回唱え事があって、例えば、「1年中ヒラクチに噛まれないように」とか、「今年も豊作に恵まれますように」、あるいは「家内安全」を念じながら行うものであった。

これらの行事は火を仲介して行われており、荒神様に供え物をすることや、荒神様と土地の神様との結びつきが非常に強い地域であることなども考慮すると、一種の農耕神事に通じると考えられる。

M.ポッポラ（成木責め）【1月14～15日】

1月15日は十五日正月といわれるが、小正月の行事は1月14日に行われる。ポッポラというのはキャーハンの木とこの地で呼ばれている木を長さ1尺くらいに切ってきて、2本を1対で神棚に一晩据えるものであった。おそらく、木棒を対で神棚に据えるのは、それらが木偶として男女の御神体を意味するものであり、1月14日の晩は一種の神の夜と言えることになる。

翌日にはポッポラを神棚から下ろして、子供達が家の生木（なりき）（成木）へ行って根元をたたく。柿の木、梅の木、桃の木などの根元を、皮が剥げるまで「センナレ、マンナレ」と言って叩いた。これらの行事は、民俗学で一般に「成木（なりき）責め」と言っているもので、五島列島一帯では「センナレ、マンナレ」とも言っている。これらは新年になって豊作を願う意味で行う行事として、かなり広い地域で行われているものであり、予祝の行事として代表的なものである。

N.尻たたき【1月15日晩】

小正月のもう一つの行事は、尻たたきである。15 日の晩、男の子たちがキャーハンの木で未婚の女性の尻を叩いてまわるのである。

キャーハンの木は、長さ90cmくらいに切ってきて皮をむき、白地になったところに墨で螺旋を描いたものである。夜になると、これを持って辻々に出て、通りかかる娘さんの尻を叩いた。これは15日の昼に行われた「センナレ、マンナレ」と全く同じもののように考えられる。木の根元を叩いて、あるいは娘さんの尻を叩いて、豊穣や安産を願うもので、ひいては良縁に恵まれるようにということで叩かれに外に出て行くという、一種の約束めいた儀式であった。直接的には、叩くという仕草によって、本来あるものを呼び覚ませるという動機付けが含まれているものと思われる。

O.子守の里帰り【1月16日】

1月 16 日には地獄のカマのフタが開くといい、地獄でも戸を開けて死んだもんを家に帰すと伝えることによって、子守などの奉公人を里家に帰した。市小木集落には、福江の崎山から子守に何人も来ていたことがあった。10歳から15、16歳頃までの子供であったという。これ

を正月と盆の 16 日には里家に帰していた。給金は全くなかったが、正月には木綿の着物を作ってやった。

ところで、久賀島の百姓・町人の娘は、江戸時代から明治時代まで、15 歳頃から 3 年間福江島の士族の家に「デボウコウ」または「三年奉公」といって必ず出すしきたりになっていたという（瀬川 1937）。この事との関係は調査で明らかにできなかったが、崎山から子守が来るようになったのは、何らかの関係がありそうな気がする。その子守も戦前にはなくなったという。

以上が正月行事のあらましである。二十日正月という言い方もあるが、正月行事のすべては、一応 1 月 15 日で終わっている。

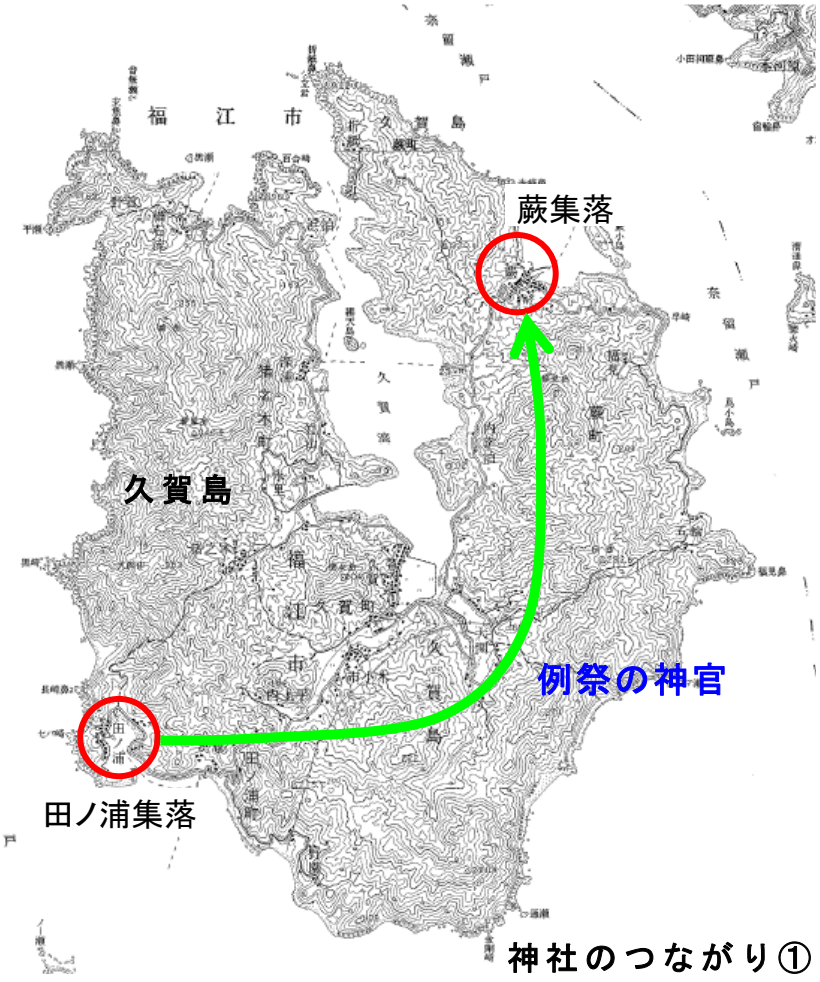
②その他の行事

正月行事以外にも神々のまつりが恒常的に行われ、年中行事の全体に大きな影響を与えている部分も見られるので、市小木集落の祭日を記す。なお、日付は旧暦である。具体的な内容については信仰の要素が強いため、次項「信仰」で述べる。

- 村祭　　9月7日
- 金比羅様　10月10日
- 八坂神社　6月14日
- 観音講　　毎月17日
- 大師講　　毎月21日
- 男講　　毎月10日、15日、17日、25日
- 女講　　毎月6日、16日、20日、23日

第 2 節　信仰

ここでは、年中行事と同様に昭和 55 年の民俗調査成果を参照しつつ、蕨集落と市小木集落の状況を述べる（立平 1981）。また、久賀島におけるかくれキリシタン習俗についても触れたい。なお、日付は特に断りがない限り旧暦である。



（1）蕨集落

①蕨神社

蕨集落の氏神で、祭神は大国主命である。2 月 2 日～3 日にかけて例祭が行われ、これは村祭を兼ねていた。

2 月 2 日には「丑の刻さがり」と言い、午前 2 時頃から「神」がおくだりになった。宮ん道を通って、お旅所まで御輿が渡御するのである。2 月 3 日は村中をまわって、神社へおのぼりになった。当日は蕨集落の各組から 1 人ずつ 3 人の宮総代が出て、まつり番をつとめる。神官は田ノ浦神社から来てもらったという。

特に注意を引くのは、「丑の刻さがり」である。氏子は前日から神社に詰めなければならず、前日祭としての宵宮の意味するところが示唆されている気がする。さらに、祭日は闇夜にあたっており、暗闇を介して神がおりますという形式をとっている。

②金比羅様

金比羅様は、崇神天皇であると伝えられている。その関係は明かでないが、船を持った人たちが、航海安全の神様として祀った。

祭日は 3 月 10 日、6 月 10 日、10 月 10 日である。これらが例祭になるが、この日を含めて毎月 10 日には、「日ごもり」をジイサン、バアサンが行っていたという。

また、蕨集落にはコンピラ講が 3 組あった。村内の各組に 1 講ずつあったわけである。その中でも須河崎組が最も熱心で、毎年 10 月 10 日前後に組内から 2〜3 人が四国へ代参詣でをしていたという。

③祇園様

祭日は旧暦 6 月 15 日。祭神として素戔嗚尊を祀っていると伝える。祇園様信仰は、京都八坂神社の旧名を祇園社といい、その民間祭祀として一般に普及したものである。また、別名を牛頭天王にあて、牛馬の守護神として信仰されたため、普及した背景を持っている。

まつりの当日は、オバアサン達がボタモチなどを持ち寄って「日ごもり」をした。

④弁天様

久賀港内の幸泊下に祀られており、祭日が旧暦 8 月 15 日である。当日、宮総代が御神酒、魚を持って参詣した。

⑤伊勢講

講組織は各組に 1 組ずつ、3 つの講があった。例会が毎月 11 日、祭日が 1 月 11 日、5 月 11 日、9 月 11 日であった。春頃、各組から 1 人ずつ伊勢神宮へ参詣する代参講の形をとっていた。久賀島内の 4 村は、それぞれに伊勢講を持ち、交代で代参を行っている。

⑥天神講

蕨集落では、天神様が太宰府の神様のみを指すのではないと言われている。疫病神の性格を持っているように語った。命日が 1 月 25 日、5 月 25 日、9 月 25 日である。この日は子供達が集まって、宿を持ち回りで習字の練習などを行い、蕨神社に奉納した。その後、宿ではゼンザイ、スシ、アマザケなどを作ってもらい、共同飲食があった。

⑦お地蔵様

蕨集落には、「高麗なおり」と言い伝えられてきた地蔵様がある。久賀島の沖に高麗瀬と呼ばれる暗礁があり、昔は島であったものが沈んだ場所と言い伝えられている。島が沈む前にそこから持ち出されたのがこの地蔵であり、その後キリシタンが持ち伝えたという。

その地蔵様は、村はずれの観音堂の一角に移されている。砂岩質の石彫で頸部が妙に長い異様な感じを受ける仏様である。光背と台座の高さ 75cm、仏様の立像 34cm である。

この地蔵様をお守りするのが地蔵講で、他地域の地蔵講とはかなり性格が異なっている。命日が毎月 1 日と 17 日で、オバアサン達がおこもりをしている。

⑧大師講

オダイシ様やコウボウ様と呼ばれている講で、毎月 17 日、21 日に「日ごもり」をした。墓地の脇にある観音堂には、一角に先述した地蔵様が祀られているが、主体は女性の神様である観音様とオダイシ様が祀られている。おこもりの日は重なっているが、コウボウ様の大祭が 3 月 21 日に行われていることから、観音様のおこもりが毎月 17 日、コウボウ様のおこもりが毎

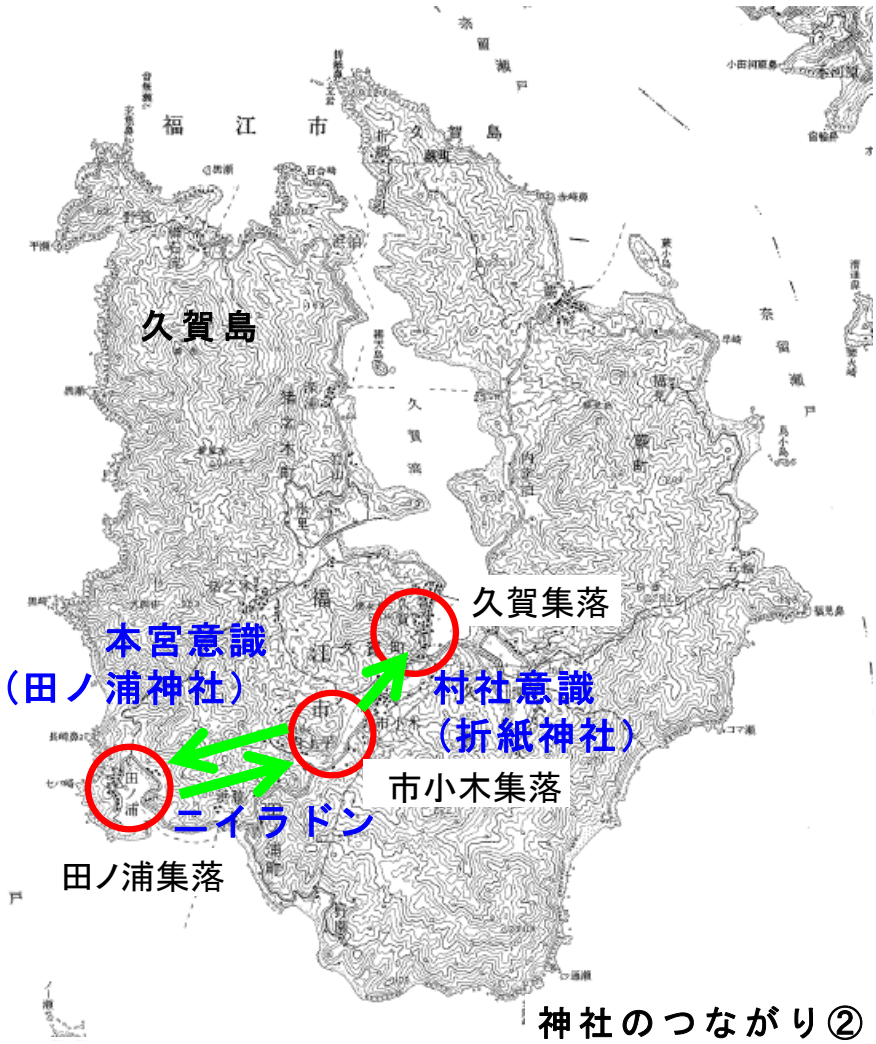
月 21 日と推測される。この日は、村内のおばあさんや主婦が寄って御詠歌を唱えたり、一種の憩いの場ともなった。

講組織については、信仰的なもののため金銭の持ち寄りで行われており、組織だったものではなかった。

（2）市小木集落

①猿田彦神社

市小木集落の氏神様である。祭日は旧暦 9 月 17 日で、この日は村祭を兼ねていた。この日は、市小木集落在住の「ニイラドン」と呼ばれる民間神主が祭祀を司った。氏子は、注連縄を取り替えて参詣する。神社には御輿が 1 台あって、1 年交替で御輿を出して家々を回った。



猿田彦神社の御神体は「天狗さん」と伝えられる。御神体には、天狗の人形がおかれているという。その天狗さんは、神様の一番先走りであり、神様の行列があるとき先頭にひとになぞらえられている。

なお、市小木集落では、村社は本久賀の折紙神社であるという意識が残っており、初詣でなど折紙神社に詣ってから猿田彦神社に詣るという人もいた。また、田ノ浦神社が本宮という人もいた。これは、市小木集落のニイラドンの本家が田ノ浦神社の神官であったことによるものであろう。

②ニイラドン

ニイラドンと呼ばれる人は、神主を助けて神主の下にいる人をいう。市小木集落に K 氏とい

うニイラドンが住んでいて、父親もニイラドンであったことから、世襲制のようにも考えられる。また、田ノ浦集落の神社には同姓の神官がおり、これを本宮と言っているのは、田ノ浦神社の分かれであるとも考えられる。

神官とニイラドンは、はっきりとした違いがあったにもかかわらず、一般の人は神官までニイラドンと呼ぶことがあったらしい。なお、ニイラドンの「ニイラ」の語源は明かでない。

③講

市小木集落にはたくさんの講があった。特に、信仰のための講がいくつかあったが、実際は親睦の役割を果たしているようにも見えた。

観音講は毎月 17 日の晩、14～15 人程の人々が「当前（とうまえ）」と呼ばれる宿に集まる。これは主婦組で行われた。

大師講は毎月 21 日の晩で、「日なぐれ」といってバンバさん達が「当前」に集まった。

ほかに、昔は毎月 24 日に観音堂と呼ばれる地区のお堂におこもりし、線香やロウソクを灯して念仏をあげていた。そして 10 人ほどが寝泊まりしたという。

また、男講や女講として別々に行われる集まりがあり、月のうち半分近くも講の集まりがあったりしたという。

（３）神社仏閣

①田ノ浦神社

- 所在：福江市田ノ浦町
- 祭神：大己貴神、少彦名神、姫神
- 例祭：旧 1 月 15 日
- 由緒：創建年代は不詳であるが、宇久家の祈願社として創建され、医王権現宮と称して崇敬され、領主から 1 石 4 斗 1 升 4 合の奉納があり、時の代官が奉幣使として参向するなど、領主累代の崇敬厚い神社であった。特に江戸参勤から領主が往復する都度参詣し、海陸安全の祈願神楽が奉納された。また、遣唐使が田ノ浦に入港した際、この宮において海上安全祈願をしたといわれている。

②鎮守神社

- 所在：福江市田ノ浦町字小浦
- 祭神：猿田彦神
- 例祭：旧 9 月 17 日
- 由緒：創建不詳。古くは明神権現と称していたが、明治 3（1870）年に鎮守神社と改称した。古くは遣唐使の海上安全祈願社であったという。藩主より社領 1 斗 1 升 4 合を寄進され、累代の崇敬厚かった神社である。

  田浦港湾口に鎮座所である明神山があるが、ここの砂嘴は自然の防波堤となり、船舶を停泊するには良港となっている。明神山はもともと独立島であったものを、遣唐使船の停泊地として重要であったため、松を植えて祈願所として神社創建に至ったものである。

③折紙神社

- 所在：五島市久賀町
- 祭神：天照大神、あめのこやねのかみ、ほむだわけのかみ
- 例祭：新暦 10 月 21 日
- 由緒：創建年代は明かでないが、慶長元(1596)年、伊勢の国から天照大神の神璽である紙札を勧請したという。「折紙」は紙符を意味するともいい、また、「降神」の転化ともいう。古来より久賀島の総社で、社領 2 石 6 斗 9 升 6 合を寄付されて、藩主累代の崇敬扱った神社である。
  明治 24(1891)年、竹山田にあったものを本久賀に移転し、さらに明治 43(1910)年に現在の境内に移った。神殿は熱田神宮と同型で、用材は尾張(愛知県)から搬入し、尾張の大工が建築したもので、様式は熱田神宮の神殿そのものである。

④天満神社

- 所在：福江市久賀町字久賀
- 祭神：菅原道真
- 例祭：旧 5 月 25 日
- 由緒：不詳であるが、境内の高麗犬に彫刻された文字によれば、「寛政十年奉建」とある。

⑤猿田彦神社

- 所在：福江市蕨町字蕨畑
- 祭神：猿田彦神
- 例祭：旧 9 月 17 日
- 由緒：不詳であるが、古くより霊験あらたかにして、修験業者の参籠が多かったという。

⑥大開神社

- 所在：福江市久賀町字中島
- 祭神：久々能知神
- 例祭：旧 9 月 15 日
- 由緒：不詳であるが、古くは御坂様と称していた。慶応元(1865)年頃現在の場所に移り、大開神社と改称した。

⑦石神神社

- 所在：福江市猪之木町字宮ノ下
- 祭神：事代主神
- 例祭：旧 9 月 27 日
- 由緒：不詳であるが、古く漁民の大漁満足の祈願社として創建され、のち文政年間（1818～1829 年）から村民の氏神として崇敬されてきた。

⑧七社神社

- 所在：福江市猪之木町細石流
- 祭神：大山祇神
- 例祭：旧 9 月 25 日
- 由緒：不詳であるが、村人の大漁祈願社として創建された。昔 7 つの首が漂着したので、それを祀ったという言い伝えが残る。

⑨蕨神社

- 所在：福江市蕨町字牟田
- 祭神：事代主神
- 例祭：旧 2 月 15 日
- 由緒：不詳であるが、慶応年間（1865～1867 年）頃にはすでに社殿があったという。藩主より社領 8 斗 2 升を献じられ、歴代藩主はじめ村民の崇敬を集めて現在に至っている。

⑩塩浜神社

- 所在：福江市久賀町字深浦
- 祭神：綿津見神
- 例祭：旧 9 月 2 日
- 由緒：創建不詳。漁民の大漁祈願社として創建された。

⑪禅海寺

- 所在：福江市久賀町
- 本尊：阿弥陀如来
- 宗派：曹洞宗
- 由緒：慶安 3(1650)年に大円寺九世普山林周山和尚が創建した寺。宝暦 5(1755)年の寺領は 12 石であった。伽藍天井絵が有名で、広さ 10 畳分、80 枚にわたって描かれている。また、檀家は広く福江島にも存在するが、要望を受けて昭和 63(1988)年に福江市松山町に布教所(分院)ができた。運営については禅海寺住職が兼任している。

（4）教会堂

①浜脇教会

田ノ浦町に所在する。明治 14 年（1881)、久賀島で最初に教会建てられ、この時の教会堂は現在五輪地区に移築されている。

現在の教会堂は、昭和 6 年に五島で最初の鉄筋コンクリート造の教会堂として建築された。

②牢屋の窄殉教記念教会

明治元年(1868)に始まった五島崩れの発端の地に建てられた教会堂である。敷地内には記念聖堂のほか殉教記念碑も整備されている。

③五輪教会

明治 14 年(1881)に浜脇教会堂として建てられた教会堂を、昭和 6 年(1931)に五輪地区へ移築し、当地の信仰の拠り所とした。昭和 60 年、老朽化が甚だしくなったため、隣接して新しい教会堂を建築。これが現在の五輪教会堂である。

④旧五輪教会堂

明治 14 年の建築で、元々浜脇地区に建てられた教会堂を移築したものである。現在は文化財として五島市の所有になっている。

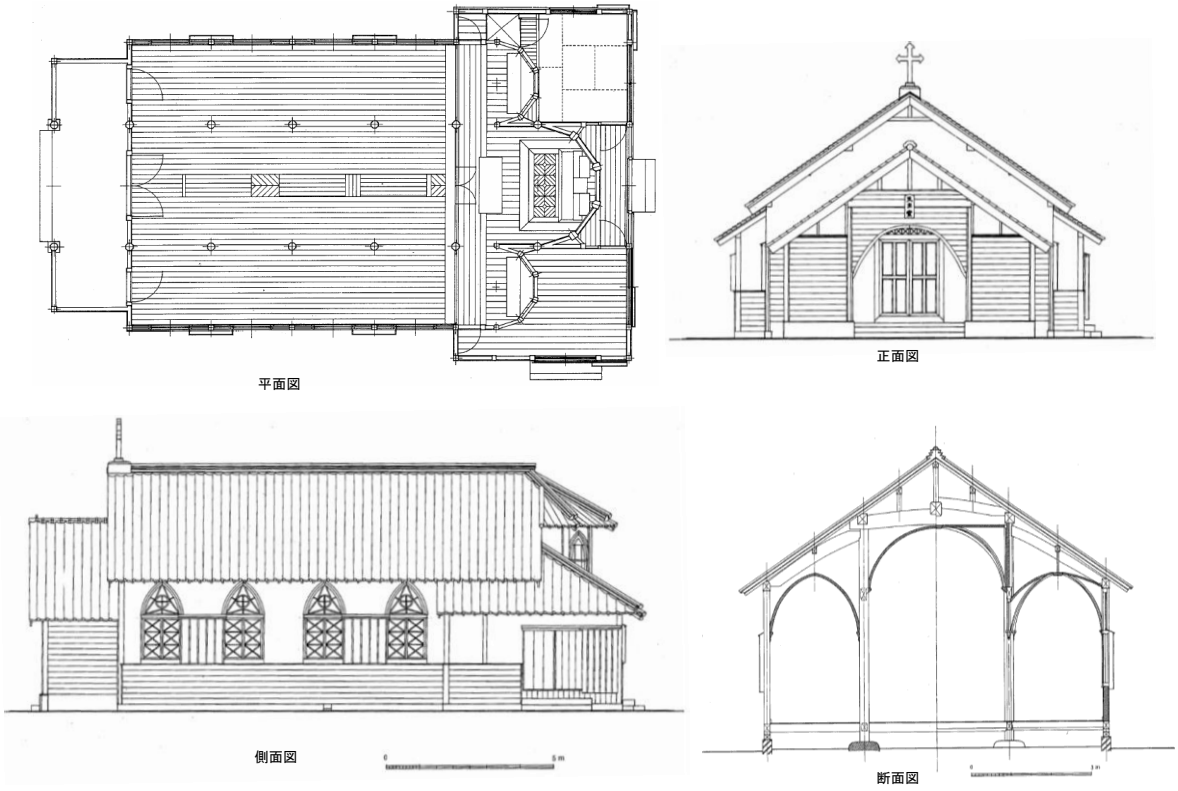
外観は和風でありながら内部は定法どおりの教会建築様式に仕上げている。明治初期の教会建築史を物語る、土俗的建築様式を持つ貴重な建築物として、平成 11 年国の重要文化財の指定を受けた。

旧五輪教会堂(左)と五輪教会(右)

（5）かくれキリシタン習俗

①歴史と現状

ルイス・デ・アルメイダが五島の島々へキリスト教の布教を開始したのは、永禄 9(1566)年からである。その後、久賀島には大村藩からのかくれキリシタンの移住者が寛政年間に相次いだ記録がある。また、明治元年には政府によるキリシタン弾圧が起こり、火責め、水責め、算木責めの拷問を受けた。特に、老若男女 200 名余りが収容された「牢屋の窄」には、わずか 6 坪の牢屋に押し込められ、飢えと苦痛のために死者が続出したという。8 ヶ月の入牢で死者 39 人、釈放直後に 3 人がなくなった悲惨な事件であった。



出典：「長崎県建造物復元記録図報告書」長崎県、1988

それでも、かくれキリシタンが昭和 35 年頃まで信仰を守り続けていたことが、平成 9 年の調査で判明した。以下はその調査時の記録である。ただし、現在は信仰の継承は行われていない。

②組織

久賀島猪之木町の竹山と永里には、最盛期で 40 戸ほどがあったというが、その内の 20 戸がかくれキリシタンであったという。

役職については必ずしも明確でないが、4 人の人が集会を運営していたという。地元の人は「ムニャムニャ」と呼ぶ集まりの日には、4 人の人が障子を閉め切って唱え事をしていた。赤塗りの高お膳に、茶碗いっぱいの飯をついで供えていた。この場所は男性だけで、女性は決して入れなかった。

ムニャムニャはオラショのことではないかと思われるが、その集まりは厳重に行われたため、人に気づかれることはなかった。かくれキリシタンの一員で、この集まりの際、見張りをする人が決まっていたという。

「牢屋の窄」のような明治初年の弾圧を経験し、それも後このような組織が存在したことについて、今までどうして人に言わなかったのか尋ねると、「隠すことが一つの目的であった」と答えている。集まりが行われなくなって 38 年になるという。

③信仰形態

この地の祭祀は神道祭と言い、竹山神社を設け、長く祭りが行われていた。竹山神社に石の

鳥居があり、社殿が設けられ、見たところでは他の神社と異なるところは全く見られなかった。

祭神はその名称は明かでなかったが、稲穂をもった木像であったという。台風の時に吹き出されていたのを拾って中に納めた人がいて、その時に確認したという。

この地区の人々は葬式は神道で行っていたが、それは表面だけで、神職が帰るとすぐに注連縄を切って自分らのやり方で葬式をした。しかし、神職はそのことを全く知らなかったはずだという。

ところで、今日久賀島に住むかくれキリシタンの末裔の人々は、全く信仰を持たないという。そして、かくれキリシタンとカトリックとは全然別のものであると言っていた。ある女性が亡くなる際、「キリスト教で送ってくれ」と遺言されたが、この時のキリスト教はかくれキリシタンのことであった。かくれキリシタンの信仰では、神社の鳥居をくぐってはいけないと言われていたので、神道祭も隠れ蓑ではなかったかという。

④行事

行事については毎月何かが行われていたというが、キリシタンの行事と地元の一般の行事との区別にはなかった。正月は元旦を祝い、2 日が船祝い（船霊様）、3 日にかくれキリシタンの集まりがあり、7 日には七草粥を炊いたという。2 月は初午を、3 月は節句、4 月は花見をしたという。ただし、昔の話でよく思い出さないが、暦を読んで役職の人がその日を決めていたという。これが日繰りではなかったかと思われる。

久賀島の年中行事については、正月行事を中心にたいへん丁寧に念入りに行われている。また、村々に祀られる神々も多く、毎月の祭りを入れるとその数は相当なものになる。

実体は不明であるが、久賀島全体では1月3日を不浄日として何もしない日になっているが、かくれキリシタンはその日にお祭りをしていた。この点がかくれキリシタンと他の住民の行事の違いとして認められた。

⑤伝承・遺跡

A.折紙の鼻

キリシタンが五島に渡ってくる頃の事について、久賀島でわずかに伝えている事があった。

久賀島の入り口に折紙の鼻というところがある。そこは 30m もの断崖絶壁が海に入る瀬となっているところで、海の難所でもある。

ここに、後から来る人に分かるようにと、折紙を目印として残した場所がある。それで地名が残っているといい、キリシタンの五島への移住を物語る遺跡である。ここから飛瀬に渡って、岐宿町へといったという。

B.竹山神社

遺跡としては竹山神社が完全な形で残っていたが、現在はなくなっている。竹山神社はかくれキリシタンの信仰形態を示すものであったが、昭和 38 年以降神社での祭りをしなくなったという。

祭祀を行っていた人々は「神社を捨てた」という表現をしている。もともとこの地は個人所有地であったが、村に寄贈して神社を設けたという。氏子が金を出し合って神社を建てたので共同のものという考えであったが、無断で境内の樹木を伐採する人がいてごたごたが続き、神社を捨てたということである。戦後、イワシの豊漁が続き、茹で干しイリコにするために神社の松林が伐採され、薪にされたという。また、炭坑の坑木のために伐採されたともいう。

⑥その他

久賀島にかくれキリシタンが昭和 35 年まで伝承された事について、「牢屋の窄」の事件が大きく影響していたと考えられる。かつてのかくれキリシタンが、「隠すことが目的であった」と証言していることは、そのことを十分物語っている。また、「神道というのはかくれキリシタンのことです」と明確に証言していた。自らをかくれキリシタンと呼ぶのは最近のことと思われるが、その集まりを今日に至るまで捨てたことで、一定の距離を置いて考える事ができるようになったものと考えられる。